ソーシャル・ネットワークは育児負担感を和らげるか？

佐藤　勢子
福山大学大学院人間科学研究科

キーワード：育児負担感，ソーシャル・ネットワーク，育児ネットワーク，コンボイ

はじめに

これまで家族や地域の中で受け継がれてきた子育ての知識や経験が，次代を担う子育て世代に伝わらなくなり，子育てに不安を感じる家庭が増加している。また，地域での交流が希薄になったために，出産や子育てなど日常生活にかかわる様々な情報交換や子ども同士を含む地域住民との触れ合いの機会が少なくなり，子育て中の家庭では，過保護や過干渉，虐待といった親子関係の問題が生じやすくなっていると考えられる。

核家族化により子育てを自分一人で「がんばらなければ」という思いが母親たちを不安にかりたてたり，子育て中に子どもに対してイライラする瞬間を経験し，どんな母親でも虐待者になる可能性を持っている。父親の育児休業（育休）取得率もまだまだ低く，父親が育児に参加するために育児休業を取ることの難しさを感じる。「子育ては母親のもの」という考え方，職場に迷惑がかかる，休業中の収入などの問題が父親の育児休業を阻んでいると思われる。

育児不安・育児ストレスに焦点を当てた研究は多く見られるが，その定義は研究者によってまちまちである。例えば，牧野（1982）は，育児不安を「子どもや子育てに対する蓄積された漠然とした恐れを含む情緒の状態」と定義している。荒牧・田村（2003）は，育児不安を「育児によって生じる心配事や悩み事，また負担感や束縛感が蓄積された結果生み出される不安感」と定義する。荒牧・無藤（2008）によれば，育児への否定的な感情が「育児不安」・「育児ストレス」であり，「育児への負担感」と「育児への不安感」に分けられる。育児への否定的感情は，日常的な育児場面において生じる苛立ちや束縛感，子どもへの嫌悪感などを含み，子どもの発達や成長，自分自身の親としての適性への不安感としている。Lazarus（1984）の「ストレス認知理論」によれば，負担感は環境刺激そのものに比べて，潜在的ストレッサーに対するネガティブな認知評価であり，負担感が個々人の心理的，身体的なストレス症状とより密接に関係することが指摘されている。また，中嶋・齋藤・岡田（1999）は，子育ては子どもの健康や疾病あるいは発達状態にかかわらず，母親にとってストレスフルなでき事としている。本研究では，育児負担感については，中嶋・齋藤・岡田の「育児負担感指標」を使用した。「育児負担感指標」は，母親の子どもに対するネガティブな感情と育児に伴う母親自身の社会的活動の制限に関連した内容を測定している。また育児中の母親，父親のストレス，不安感，負担感の低減や健康の維持・回復にとって，他者からのソーシャル・サポートが重要であることは，これまでの研究でも明らかである。

ソーシャル・サポートとは「家族，友人，隣人，同僚や専門家など，ある個人をとりまくさまざまな人からの有形・無形の援助」，または「援助を必要としている人や悩みを抱えている個人に対して，周囲の人々から与えられるサポート」とされている（福丸，2008）。野口（1991）は，高齢者の社会関係および対人関係は重要な課題であるとし，ソーシャル・ネットワークは対人関係の構造的側面に，ソーシャル・サポートはその機能的側面に着目した。野口の構造的側面としてのソーシャル・ネットワークは，婚姻関係，友人関係，組織的集団への参加など，社会的関係の種類や量，社会的関係の密度や範囲，相互の役割などであり，機能的側面としてのソーシャル・サポートは，情緒的な支援，物理的・手段的な支援，評価に基づく支援，各種の情報などである（田原，2002）。

ところで，個人が取り結んでいるネットワークには様々ものがある。松田（2001）は，家族，親族，非親族の関係をインフォーマル・ネットワークと呼び，公共・民間のサービスをフォーマル・ネットワークと呼ぶ。また，中村（2005）によれば，母親に対する直接・間接の育児援助を行う地域の人々との関係を育児ネットワークと呼

び，その中でも自治体の乳幼児学級や保育所・幼稚園の主催する育児相談をフォーマル・ネットワークと呼び，母親の自主活動である育児サークルや住民主体型の子育て広場・子育てサロンをインフォーマル・ネットワークと呼んでいる。これらの親たちを含む多くの人々によって作られている社会環境は，親たちを取り巻き何重にも層をなしていると考えられる。子どもたちは，これらの親たちの層の中に生まれ，育っていると考えられる。

子育て中の親のソーシャル・ネットワークとしては，配偶者，自分の親，配偶者の親，自分の兄弟，配偶者の兄弟などの親族ネットワーク，子ども時代の友人，学生時代の友人，仕事を通じての友人，趣味やボランティアの友人などのパーソナル・ネットワーク，子どもを通じての友人，近所の友人，保育所・幼稚園・学校の先生などの育児ネットワーク，医療機関の医師・職員，行政関係・公的な相談機関の職員などのフォーマル・ネットワークなどがあり，これら子育て中の親たちにとってとても重要だと考えられる。

2000年に介護保険制度が導入されて以来徐々にではあるが，高齢者のネットワークは確立されつつある。しかし，子育てに関するネットワークはまだまだ確立されているとは言えない。親の心理面のwell-beingの維持・向上が社会的な課題となっている昨今，親のwell-beingの維持・向上のカギを握るのが配偶者，親族，非親族のネットワークである。馬場・近藤（2004）によれば，ソーシャル・ネットワークの規模が小さい場合，あるいはソーシャル・サポートが小さい場合に健康状態が悪化すること，ネットワークやサポートの規模が大きいほど，病気に対する発症率が有意に低いとされている。松田（2001）によれば，母親のwell-being（心理的安寧）の維持・向上のかぎを握るのが父親，親族，非親族の育児ネットワークであるとし，育児ネットワークを多く持つ人ほど育児不安は低いとしている（宮坂，2000）。また，育児中の母親や父親の心身の健康や生活に対する満足感や子育てに対する負担感は子どもの心身の発達に影響を及ぼすと考えられる。

Kahn & Antonucci（1980）はソーシャル・ネットワークに関連してコンボイモデル（convoy model）を提唱した（図１に示す）。コンボイとは，本来護衛艦のことであり，彼らは，船が船団を組んで航海する時，戦艦が周りを何隻もの護衛艦にかこまれ，守られていることになぞらえて，「コンボイ」すなわち個人のネットワークという概念をその成員間で社会的支えが与えられたり，受け取られたりする構造として提案したのである。

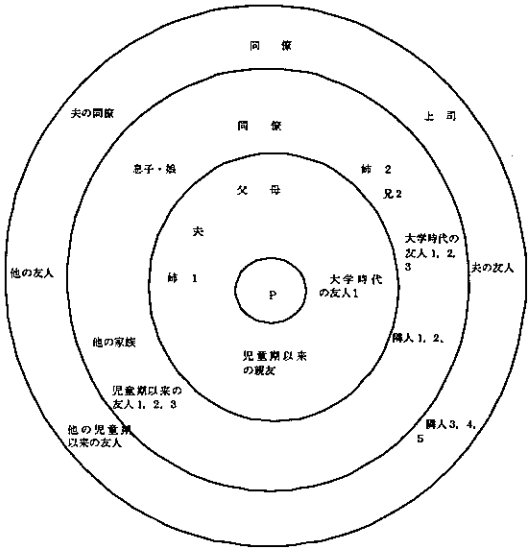

図１　コンボイ（convoy）モデル

そこで本研究において，ソーシャル・ネットワークが，育児中の母親，父親の健康感，生活満足感，育児負担感に影響するメカニズムを明らかにし，育児負担感は，はたして母親だけが感じるものであるのか，父親にとっての育児負担感はどのようなものであるか，育児中の母親，父親のための指針を得ることを目的とする。そのため，母親・父親の育児負担感の違いと母親・父親のソーシャル・ネットワークの違いをみるため両親を分析することとした。本研究において，どのようなネットワークの構造が効果的にサポートを生み出すのか。この資源が発揮するサポート効果を，ネットワーク構造の観点から明らかにするため，コンボイモデルを使用する。

方法

対象者　F市の２園の保育園に通う355名の園児の両親を対象とし質問紙を担任より配布してもらった。回収数は222世帯（回収率62.5%），父親，母親の回答は161世帯（72.5%），母親のみの回答は44人（19.8%）；単身親の回答は17人（7.7%）であった。

調査方法　２園に調査協力を依頼し，園ごとに学級担任より保護者あての依頼文を同封し配布・回収を行った。質問紙には，回答は統計的に処理されることを明記した。

調査期間　2010年3月1日から2010年3月15日

調査内容

1. フェイスシート

回答者の性別，年齢，同居人数，家族のメンバー，子どもの人数，子どもの年齢，子どもの性別，仕事の有無，仕事の勤務状況，仕事の満足度，健康感，生活満足度，子育て満足感

2. 育児負担感

育児負担感については，中嶋・齋藤・岡田（2000）の「育児負担感指標」を使用いた。「育児負担感指標」の16項目については，まったくない：1，たまにある：2，時々ある：3，しばしばある：4，いつもある：5の5件法で尋ねる形式になっており，得点が高いほど負担感が強くなるように尺度化されている。“子どもを見るだけでイライラする”など母親の子どもに対する否定的感情認知（4項目），“子どものために，社会的な役割が果たせず，不安になる”など育児による社会的活動制限の認知（4項目），“子育てに費用がかかりすぎると感じる”など経済的負担認知（4項目），“子育てそのものに苦痛を感じる”など介護負担感認知（4項目）の計4領域16項目で構成されている。

3. サポート源

回答者に関わりのある，親族ネットワーク（配偶者，自分の親，配偶者の親，自分の兄弟，配偶所の兄弟），パーソナル・ネットワーク（子ども時代・学生時代の友人，仕事を通じての友人，趣味やボランティアの友人），育児ネットワーク（子どもを通じての友人，近所の友人，保育所・幼稚園・学校の先生），フォーマル・ネットワーク（医療機関の医師・職員，行政関係・公的な相談機関の職員）がどの程度回答者にとって助けとなっているかを，4件法（1：いない～4：とても助けになる）で評定してもらった。

4. コンボイ

図１の三重円の中心のPを回答者だと考えて回答者にとって信頼でき，心の支えとしている人をPに近い円から記入してもらうように教示した。ことばを統一するため親族ネットワーク（配偶者，自分の親，配偶者の親，自分の兄弟，配偶所の兄弟），パーソナル・ネットワーク（子ども時代・学生時代の友人，仕事を通じての友人，趣味やボランティアの友人），育児ネットワーク（子どもを通じての友人，近所の友人，保育所・幼稚園・学校の先生），フォーマル・ネットワーク（医療機関の医師・職員，行政関係・公的な相談機関の職員）というように記入例を表記した。

結果

親の状況

親の年齢は20歳から48歳の間に分布し，父親の平均年齢は34.8歳（±4.4），母親の平均年齢は33.7歳（±4.4），子どもの数は1～5人，1人は24.8%，2人は55.4%，3人は16.4%，4人は2.3%，5人は1.0%，もっとも多いのは2人の55.4%である。家族構成は「核家族」が76.2%，「三世代同居世帯」は20.9%，「単身親家庭」は2.9%，同居人数は2～10人で，4人家族は45.2%，3人家族は21.4%，5人家族は13.3%である。就労に関

しては，父親の98.8%が何らかの仕事に従事している。また母親の87.4%が何らかの仕事に従事し，12.6%が専業主婦である。勤務状況に関して，父親はすべてフルタイムで勤務している。母親に関してはフルタイム43.6%，パートタイム56.4%である。

育児負担感

育児負担感尺度に対する16項目の回答に対して，平均値，標準偏差を算出し（表1），主因子法，プロマックス回転による因子分析を行った。その結果，3因子が得られた。岡田（2004）の研究では4因子が得られたが，本研究では3因子構造を示す結果となった。その中から十分な因子負荷量を示さなかった2項目を分析から除外し，残りの14項目に対して，再度，主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。

表1　父親・母親の育児負担感の差

項目	全体（*N*=372）平均（*SD*）	母親（*N*=216）平均（*SD*）	父親（*N*=156）平均（*SD*）	*t*値
子どもに対する否定的な感情				
子育てそのものに，苦痛を感じる	1.46(0.69)	1.56(0.75)	1.33(0.59)	3.43 **
子どもを見るだけでイライラする	1.61(0.78)	1.72(0.83)	1.42(0.67)	3.95 **
子育てに疲れて，育児を放棄したくなるときがある	1.44(0.70)	1.56(0.76)	1.26(0.54)	4.54 **
子どもに対して，われを忘れてしまうほど頭に血がのぼるときがある	1.77(0.87)	1.92(0.92)	1.54(0.74)	4.10
子育てがいつまで続くのか，不安になる	1.29(0.67)	1.36(0.73)	1.17(0.51)	2.97 **
適切な子育てしているにもかかわらず，報われていないと感じる	1.65(0.85)	1.75(0.87)	1.45(0.73)	3.92 **
子どもの言動に，どうしても理解に苦しむときがある	2.07(0.89)	2.18(0.92)	1.91(0.85)	3.05
子育てによって自分の健康が損なわれそうな危険性を感じる	1.45(0.83)	1.60(0.88)	1.24(0.64)	4.59 **
経済的負担感				
子育てに必要な費用が家計を圧迫していると感じる	2.33(1.27)	2.51(1.28)	2.06(1.20)	3.37
子育てに関わる出費のために，余裕のある生活ができなくなったと感じる	2.30(1.26)	2.41(1.27)	2.11(1.22)	2.27
子育てに費用がかかりすぎると感じる	2.79(1.30)	2.94(1.25)	2.54(1.33)	2.94
子育てのために，貯蓄していたお金までも使い，将来の生活に不安を感じる	1.98(1.26)	2.09(1.26)	1.76(1.20)	2.44
社会的活動制限				
子育てのために，自分自身の自由な時間がとれない	2.66(1.18)	2.88(1.17)	2.33(1.09)	4.86
子育てのために，趣味や学習などの個人的な活動に支障をきたしている	2.45(1.25)	2.73(1.32)	2.06(1.03)	5.54 **

＊＊　1%水準で有意（両側）

表2　子育て負担感因子分析

	平均（*SD*）	否定的感情	経済的負担感	社会的活動制	共通性
子育てそのものに，苦痛を感じる	1.46 (.69)	.81	.11	.17	.69
子どもを見るだけでイライラする	1.61 (.78)	.74	.17	.14	.59
子育てに疲れて，育児を放棄したくなるときがある	1.44 (.70)	.72	.17	.20	.58
子どもの対して，われを忘れてしまうほど頭に血がのぼるときがある	1.77 (.87)	.66	.15	.09	.47
子育てがいつまで続くのか，不安になる	1.29 (.67)	.66	.11	.26	.52
適切に子育てしているにもかかわらず，報われていないと感じる	1.65 (.85)	.64	.27	.09	.49
子どもの言動に，どうしても理解に苦しむときがある	2.07 (.89)	.60	.23	.09	.43
子育てによって自分の健康が損なわれそうな危険性を感じる	1.45 (.83)	.45	.30	.32	.39
子育てに必要な費用が家計を圧迫していると感じる	2.33(1.27)	.18	.88	.16	.84
子育てに関わる出費のために，余裕のある生活ができなくなったと感じる	2.30(1.26)	.18	.86	.20	.82
子どもの子育てには費用がかかりすぎると感じる	2.79(1.30)	.21	.71	.13	.57
子育てのために，貯蓄していたお金までも使い，将来の生活に不安を感じる	1.98(1.26)	.18	.60	.07	.39
子育てのために，趣味や学習などの個人的な活動に支障をきたしている	2.45(1.25)	.21	.15	.88	.84
子育てのために，自分自身の自由な時間がとれない	2.66(1.18)	.25	.23	.67	.56
	累積寄与率	27.20	47.03	58.29	

第１因子は，「子育てそのものに苦痛を感じる」，「子どもを見るだけでイライラする」，「子育てに疲れて，育児を放棄したくなるときがある」，「子どもに対して，われを忘れてしまうほど頭に血がのぼるときがある」などの８項目の負荷が高く「子どもに対する否定的な感情」因子と命名した。第２因子は，「子育てに必要な費用が家計を圧迫していると感じる」，「子育てに関わる出費のために，余裕のある生活ができなくなったと感じる」，「子どもの子育てには費用がかかりすぎると感じる」，「子育てのために，貯蓄していたお金までも使い，将来の生活に不安を感じる」の４項目の負荷が高く「経済的負担感」因子と命名した。第３因子は，「子育てのために，趣味や学習などの個人的な活動に支障をきたしている」，「子育てのために，自分自身の自由な時間がとれない」の２項目の負荷が高かったことから「社会的活動制限」因子と命名した。結果を表２に示す。

育児負担感合計得点の平均は 33.2（*SD*10.6）で，17 点から 73 点の間に分布し，やや左寄りに偏った山形を示した。下位尺度別にみると，「社会的活動制限」の平均は，母親が 2.8（*SD*1.1），父親が 2.2（*SD*0.9），「子どもに対する否定的感情」の平均は，母親が 1.9（*SD*0.7），父親が 1.6（*SD*0.5），「経済的負担感」の平均は，母親が 2.5（*SD*1.1），父親が 2.1（*SD*1.1）であった。したがって，下位尺度別にみた負担感の強さは，経済的負担感＞社会的活動制限認知＞子どもに対する否定的活動認知の順であることが明らかとなった。子どもに対する否定的な感情を持っている母親は少なく，むしろ育児のために自分自身の自由な時間ができないこと，経済的な負担感が強いことが示唆される。

母親，父親の育児負担感と健康感・生活満足感・子育て満足感の相関をみると，表３のとおりである。母親も父親も，子どもに対する否定的感情，経済的負担感，社会的活動制限に負担感を強く感じている人は，健康感も生活満足感も子育て満足感も低い。

表3　母親，父親の育児負担感と健康感・生活満足感・子育て感との相関（*N*=372）

	否定的感情	経済的負担感	社会的活動制限	健康感	生活満足感	子育て満足感
否定的感情		.46 **	.47 **	−.30 **	−.29 **	−.57 **
経済的負担感	.52 **		.38 **	−.34 **	−.42 **	−.32 **
社会的活動制限	.37 **	.42 **		−.25 **	−.21 **	−.28 **
健康感	−.33 **	−.33 **	−.23 **		.49 **	.35 **
生活満足感	−.38 **	−.48 **	−.10 **	.46 **		.41 **
子育て満足感	−.52 **	−.39 **	−.29 **	.41 **	.41 **	

＊＊　相関係数は１％水準で有意（両側）
右上　母親，　左下　父親

コンボイ

表４に母親，父親のコンボイに登場した人々をパターン別に分類した比率を示した。コンボイからみられるソーシャル・ネットワークに注目すると，コンボイの一重円に表された配偶者，自分の親，配偶者の親，自分の兄弟，配偶所の兄弟などの親族の出現数は最小値０から最大値 11 であり，平均 4.6（*SD*2.2），子ども時代・学生時代の友人，仕事を通じての友人，趣味やボランティアの友人などのパーソナル数は最小値０から最大値４であり，平均 0.5（*SD*0.8），子どもを通じての友人，近所の友人，保育所・幼稚園・学校の先生などの育児ネット数は最小値０から最大値４であり，平均 0.2（*SD*0.5），医療機関の医師・職員，行政関係・公的な相談機関の職員などフォーマル数は最小値０から最大値２である。二重円，三重円については記入しない人も多く，それぞれの出現数は低い値となった。

表4 母親・父親のコンボイに登場した人々の比率

	一重円		二重円		三重円	
	母親(%)	父親(%)	母親(%)	父親(%)	母親(%)	父親(%)
親族	**49**	**63**	13.7	15	11.9	7.5
親族・パーソナル	**27.6**	**31.1**	**21.8**	**33.1**	13.3	14.2
親族・育児	12.9	5.2	7.6	3	1.9	
親族・パーソナル・育児	9	0.7	**22.7**	9.8	6.7	1.5
親族・パーソナル・育児・フォーマル	0.5		0.9	0.8	0.5	
親族・育児・フォーマル	1					
パーソナル・育児			10.4	4.5	7.6	4.5
パーソナル			7.6	17.3	**25.2**	**31.3**
育児			4.3	3.8	4.3	0.7
フォーマル			0.5			
親族・パーソナル・フォーマル					0.5	
記入なし			10.4	12.8	**28.1**	**40.3**

コンボイがソーシャル・ネットワークの指標となりえるかどうか，その妥当性をみるためコンボイの一重円，

二重円，三重円の出現分類とサポート源を対比させる。一重円，二重円，三重円の親族ネットワークのみの割合は54.5%，14.2%，10.4%であり，親族ネットワークは他のネットワークとの組み合わせの中にも含まれている。二重円では親族とパーソナル・ネットワークの分類が26.2%で最も多くの割合を占めていた。また三重円ではパーソナル・ネットワークのみの分類が27.8%で最も多くの割合を占めていた。中心に近い一重円ほど親族ネットワークの割合が大きく，二重円，三重円ではパーソナル・ネットワークの割合が大きいと思われる。またサポート源は，親族ネットワークの中でも配偶者の存在は大きく，90%弱がお互いに助けになると感じている。また，お互いの親についても，70%から80%の間で助けになると感じている。お互いの兄弟についても，45%から50%の間で助けになると感じている。パーソナル・ネットワークの学生時代の友だちは55%，仕事を通じての友だちでも58%，趣味を通じての友だちでは，父親では「いない」が38%，母親では「いない」が65%であった。育児ネットワークの子どもを通じての友だちでは55%，近所の友だちでは38%，保育所の先生は，60%がとても助けになると感じている。フォーマル・ネットワークの病院では73%，行政機関の相談機関では18%が助けになると感じている。小さな子どもを抱える母親にとって，かかりつけ医をもつことは急なできごとに対処するための心の支えになっていると考えられる。

ソーシャル・ネットワークと育児負担感との関係

母親と父親のコンボイのパターンと性別の育児負担感得点を表５に示した。育児負担感の下位尺度を従属変数とし，父母のコンボイのパターンと性別を独立変数とする３（パターン）×２（性別）の分散分析を行った。子どもに対する否定的な感情においては，一重円，二重円，三重円に性別の主効果が有意であり（$F(1, 336)=16.97$, $p=.000$；$F(1, 336)=32.65$, $p=.000$；$F(1, 336)=15.61$, $p=.000$）父親よりも母親のほうが，子どもに対する否定的感情が高かった。経済的負担感においても，一重円，二重円に性別の主効果が有意であり（$F(1, 336)=9.69$, $p=.002$；$F(1, 336)=8.72$, $p=.003$）父親より母親のほうが，経済的負担感が高かった。社会的活動制限においても，一重円，二重円，三重円の性別の主効果が有意であり（$F(1, 336)=25.35$, $p=.000$；$F(1, 336)=27.77$, $p=.000$；$F(1, 336)=7.95$, $p=.005$）父親より母親のほうが社会的活動制限を受けていると考えられる。しかし，パターンの要因は育児負担感に何ら影響を及ぼしていなかった。

表5　父母のコンボイのパターン別負担感の平均値と標準偏差

		否定的感情の平均値（*SD*）		経済的負担感の平均値（*SD*）		社会的活動の制限の平均値（*SD*）	
		母親	父親	母親	父親	母親	父親
一重円	親族	1.89(0.67)	1.55(0.40)	2.55(1.09)	2.10(1.03)	2.93(1.08)	2.19(0.92)
	親族・パーソナ	1.87(0.54)	1.56(0.43)	2.51(1.12)	2.16(1.07)	2.66(1.01)	2.13(1.01)
	その他	199(0.81)	1.48(0.40)	2.40(1.02)	1.69(0.83)	2.78(1.32)	1.63(0.74)
	合計	1.91(0.67)	1.55(0.41)	2.50(1.08)	2.10(1.03)	2.82(1.13)	2.14(0.94)
二重円	親族	1.97(0.62)	1.45(0.41)	2.45(1.26)	2.23(1.22)	2.89(1.10)	2.25(0.77)
	親族・パーソナ	2.08(0.83)	1.56(0.40)	2.64(1.00)	2.04(0.97)	3.05(1.09)	2.15(0.96)
	その他	1.85(0.65)	1.55(0.40)	2.47(1.06)	2.07(1.03)	2.74(1.14)	2.11(1.00)
	合計	1.92(0.69)	1.54(0.40)	2.50(1.08)	2.08(1.03)	2.83(1.13)	2.14(0.95)
三重円	親族	2.16(0.98)	1.65(0.47)	2.79(1.09)	2.50(1.03)	2.62(1.09)	2.65(1.20)
	親族・パーソナ	2.10(0.90)	1.67(0.41)	2.56(1.22)	2.36(1.16)	3.07(1.24)	2.32(0.92)
	その他	1.84(0.57)	1.55(0.56)	2.45(1.05)	2.02(1.16)	2.82(1.11)	2.07(0.92)
	合計	1.92(0.69)	1.57(0.54)	2.50(1.08)	2.11(1.06)	2.83(1.13)	2.15(0.95)

考察

本研究では，園児の父母を対象に，育児負担感とソーシャル・ネットワークとの関係から，父母の育児負担感をソーシャル・ネットワークが和らげることができるかを検討することとした。

親たちにとって育児負担感が強かったのは経済的負担感，社会的活動制限，子どもに対する否定的感情の順番

であった。経済的負担感においては，母親，父親ともに負担感が強いと感じているため両者に有意差は表れなかったと考えられる。しかし，母親の方が子どもに対する否定的感情において特に父親との有意差が表れていた。母親の方が父親より子どもに対する否定的感情が強いのは，母親が父親より生活面，しつけ全般において真に子どもと関わる時間が多く，責任を感じているからだと考えられる。父親より子どもに関わる時間が多いため，自分自身の十分な時間がとれないと母親は感じていると考えられる。

本研究で使用した Kahn & Antonucci（1980）のコンボイモデルは，長期間連れ添う支援者のネットワークを意味している。それによれば，継続して支援してもらえる他者が幅広く存在することが，本人の主観的幸福感に大きな役割を果たすと考えられる。本研究において，コンボイに出現する人々の継続的な本人に対しての支援がなされているかどうかは，コンボイを見る限りでは判断しにくい。しかし，支援してもらえる他者が幅広く存在するかどうかは確認できる。コンボイに出現する人々をみると，一重円においては親族ネットワークとの組み合わせが多く，次に多かったのは，親族ネットワークとパーソナル・ネットワークだった。このことからも親族ネットワークは，とくに重要であるといえる。三重円においてはパーソナル・ネットのみの母親，父親が最も多かった。このことから，友人は子育てについての悩みや愚痴を聞いてくれ，サポートしてくれる大切な存在であるといえる。

本研究において，ソーシャル・ネットワークのパターンにより育児負担感が異なるとは言えず，育児負担感を和らげるソーシャル・ネットワークを見つけだすことはできなかった。それは多くの親族ネットワークが，育児負担感を十分に和らげる要因になっているからだと考えられる。また，本研究の分析で用いたパターン分類は大まかなものであり，ネットワークと育児負担感を関係づけるにすぎなかった。パターン分類によってそれを推測するかたちになった。そのため，育児負担感とソーシャル・ネットワークとの関係が明らかにならなかったと思われる。

昨今の社会情勢，経済状況をみると子育て中の親たちにとって決して子どもを育てやすい環境とは言えず，経済的負担は大きいと考えられる。また，子育てにのみに専念するあまり社会とのつながりが持てないと考える母親も多いようだ。どの円でもどのようなネットワークの中にいても，母親たちが社会的活動を制限されていると感じていることが窺える。社会との繋がりからもたらされる影響は大きく，親たちが社会活動の中から良い影響を受けるならば，子どもたちも良い影響を受けるのではないか。母親たちがもっと社会的活動ができるようなサポートが必要ではないかと考える。

【謝辞】本研究データの収集にあたり，ご協力くださいました２園の保護者のみなさま，２園の先生方，本研究にご協力いただきましたみなさまに心から感謝いたします。

引用文献

荒牧美佐子・田村　毅（2003）．育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャル・サポートの規定要因―幼稚園児を持つ母親の場合―　東京学芸大学紀要６部門，**55**，83-93.

荒牧美佐子・無籐　隆（2008）．育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に　発達心理学研究，**19**，87-97.

馬場康彦・近藤克則（2004）．社会的ネットワークと主観的健康感―縦断分析による検証　季刊家計経済研究，**62**，59-67.

福丸由佳（2008）．成人期と親になること　青野篤子・赤澤淳子・松並知子（編）　ジェンダーの心理学ハンドブック　ナカニシヤ出版　pp.37-56.

Kahn.R.L. & Antonucci.T.C.(1980). Convoys over the life course: Attachment, roles,and social s upport. In P.B.Baltes , & O.G.Grim , *Life span development and behavior* ,Vol.3. New York: Academic Press. pp.253-286.

Lazaru s,R, & Folkman,S.(1984). Stress, Appraisal and Coping, Springer Publishing .
牧野カツコ（1982）．乳幼児をもつ母親の生活と育児不安　家庭教育研究所紀要，**3**，34-56.
松田茂樹（2001）．インフォーマル・ネットワークと well-being（上）―育児におけるネットワークのサポート効果―　IDL（ライフデザイン研究）report，128，4-21
松田茂樹（2001）．インフォーマル・ネットワークと well-being（下）―育児におけるネットワークのサポート効果―　LDI（ライフデザイン研究）report，**129**，4-21.
宮坂靖子（2000）．育児不安と育児ネットワーク―「公園づきあい」の視点から―　家族研究論叢，**6**，55-76.
中村真弓（2005）．地域における育児ネットワークに関する研究　九州大学大学院　教育学コース院生論文集，**5**，105-118.
中嶋和夫・齋藤友介・岡田節子（1999）．母親の育児負担感に関する尺度化　厚生の指標，**46**，3　11 - 18.
野口裕二（1991）．高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルポート―友人・近隣・親戚関係の世帯類型別分析―　老年社会科学，**13**，89-105.
杉野裕子（2002）．現代の子育てと育児ネットワーク　母子研究，**22**，38-53.
田原明夫（2002）．地域で支える―ネットワークについて―　京都大学医療技術短期大学部紀要，**14**，26-38.

Do social networks soften the feeling of childcare burden?

Seiko Sato

This research attempted to verify whether a social network of parents caring for children can soften their feeling of childcare burden. 216 mothers and 156 fathers of children in 2 private nursery schools were asked to respond to the questionnaire including the scale of childcare burden, and to write their social network in a convoy model proposed by Kahn and Antonucii (1980). Mothers felt a greater burden toward childcare than fathers even though it was not so great. In addition, mothers had more private and personal networks than fathers. It is suggested that mothers soften the feeling of childcare burden by private and personal networks, although there were no significant relationships between them.

(指導教員：青野篤子)